

---

# 深紅 - SHINKU -

洛煉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

深紅 - SHINKU -

### 【Nコード】

N3263C

### 【作者名】

洛煉

### 【あらすじ】

『深紅 - SHINKU -』の重要POINTは、「運命」「赤（深紅）」「薔薇」です。物語上では、書かれておりませんが、舞台は中世の西洋をイメージして書いております。彼の浮気を赦せなかった純白の少女が、織り成す愛憎劇。この物語をご覧になるにあたって、彼の浮気相手や少女の純白、最終シーンなどいくつか謎を潜ませています。読み手様次第では、いくつもの物語がこの先に続くことになるでしょう。この物語に筆者は続きを書きませんが、皆様の想像の羽根が羽ばたくことを切にお祈り申し上げます。

『私の渴いた愛を潤すのは・・・』

貴方の裏切りと真つ赤なシャツ・・・』

深紅のカーテン。深紅のカーペット。やはり、深紅を貴重にした調度品に壁紙。むせ返るような薔薇の香り。

その中に、深紅の衣装を身に纏った一人の少女が座っていた。手には大きな赤い服を着た人 形を抱え、虚空の空をただ見つめている。

その少女の虚ろな瞳から、一粒の涙が・・・零れ落ちた。

私は、何をしているのだろうか？

その少女は、貴族の一人娘だった。少女には、両親に決められた一人の婚約者がいた。彼とは年が少し離れていたが、とても仲が良く、これといった問題などなかった。

だが・・・運命は、刻々と少女と彼に襲いかかろうとしていた。

『貴方は、運命を信じますか？』

少女は彼に問いかけた。彼は言った。

「運命がなければ君に出会うことなど、出来なかっただろうね」  
少女は頬を紅潮させ微笑した。そんな甘い一日。

幸せな日常を切り裂くのは“運命”という名の悲劇

夜空を見上げる恋人達。ありふれた風景。艶やかな女の囁き。

「お月様よりも君のほうが綺麗だよ」

それは甘い男の囁き。そんな気まぐれな一時を永遠だと信じた。不確かな言葉を運命だと信じた。繰り返される恋。満たされぬ愛。

真つ赤に映えるドレス。少女は一人、窓際で外を眺めていた。室内では、人々が晩餐会という名で集り、様々な駆け引きを繰り返している。

幼い少女は、そつと溜め息をつく。

早く彼が迎えにこないかしら・・・

そんな・・・そんな些細な期待さえ、裏切る光景を少女は見えてしまった。

暗闇のテラスで寄り添う二つの影。それは、艶やか夜のよくある風景、恋の駆け引き。

夜空の雲が引き、月光に映し出されたのは・・・

ああ。あのヒトは誰だろうか？

見間違えることがあるだろうか、それとも私は幻覚を見ているのだろうか。

そこにいるのは彼女の婚約者だった。横には、彼より年上の美しい女性。その女性の腰に回された彼の優しい手。女性の絡められたしなやかな足。親しげな光景。月が輝きを増し、照らし出すのは二人の長い影。それが二つから一つに重なり合う。

柱の影に隠れる少女。錯乱する。重い鉛が・・・どす黒い炎が、少女の全身を焦がす。全身の血の気が引いた少女は、立っている事さえままならず、壁に倒れ掛かる。倒れる花瓶。広がる赤い薔薇。花瓶から零れた水が、赤い絨毯を深い色に染め上げた。

唯、一つの真実。それは・・・？

運命の齒車は、急速に音を立てて回り出した。逃げ出すように少女は、部屋を飛び出していった。彼は、気付いていなかった。知る由もなかった。少女の純真を汚した代償を・・・

彼は、翌日少女の屋敷に現れた。少女は次の日、そ知らぬ顔でやってきた彼を穏やかな微笑で迎え入れた。彼は片手に真つ赤な薔薇の花束を持ち、白いタキシードを纏っていた。少女は、昨日と同じデザインの深紅のドレス。違う点といえば、所々に赤黒い模様が転々としているということだけだろうか。胸に咲いた真つ赤な薔薇のコサージュは、静かに彼を見つめていた。

それは、誰に渡すのかしら？

少女は微笑みながら、その真つ赤な薔薇を指しながら楽しそうに言った。

「もちろん、君へのプレゼントさ」

彼は、少女に真つ赤な薔薇の花束を渡した。少女は、「ありがとう」と言って彼から花束を受け取り、それを侍女に渡すと部屋に飾るようにと指示した。

ぼーん、ぼーん。午後二時を指す振り子時計の重厚な響き。少女は、静かに彼を自分の部屋に招きいれた。

彼は驚いた。

深紅のカーテンに深紅のカーペット。やはり、深紅を貴重にした調度品に壁紙。すべて、深紅で彩られた世界。昨日までは、確かに赤を貴重とした部屋だったが、ここまでではなかったはずだ。

「どうしたの？」

とまどいながらも彼は問うた。

誰も知らない。誰もわからない。運命の歯車がコトンツコトンツと回る。ゆつくりとそれは静かに。

彼女は小首を可愛らしく傾げながら言った。

貴方は、私が深い赤色のモノが好きなこと、貴方は知っているでしょう？

彼は頷くしか出来なかった。彼は少女に違和感を感じたが、きつと気のせいだろうと思ひ直し、席に着くと用意してあったお茶に手を掛けた。

それからしばらくは、楽しげな談笑が続いた。しかし、少女の表情は彼を部屋に招きいれたところから変わらない。少女の張り付いたようなその微笑に、彼は全く気付かない。

「今日は、薔薇の香水を使っているんだね？」  
何気ない一言。

夏の突風が激しく窓ガラスを揺らす。限界を超えて回り続けた歯車は、静かに壊れゆく。もう止められないと、囁くように・・・

少女はぱあっと紅の頬を綻ばせて言った。真っ赤なルージュに飾られた、小さな唇が言葉を紡ぐ。それは、嬉しそうに。

そうよ “お母様” から頂いたの 素敵な香りでしょ？

「ああ。素敵だよ」

にこやかに笑う彼。深紅の車輪は、もう止められない。彼は赤い

薔薇の運命に逆らうことは出来ない。

昨日の 彼女も 付けてイタデショウ？

彼の表情が凍りついた。少女が知らないはずの真実。少女の瞳は、狂気に満ちていた。につこりと微笑う少女。戦慄が彼を襲った。なぜ、それを知っているのか。なぜ少女は・・・なぜ・・・

教エテ下サイます力？ アノ彼女ハ 誰です力？

「彼女は・・・彼女は・・・」

声が震えた。それは、少女が知ってはならない真実。彼女は・・・なのだから。

少女の手に握られたナイフ。壮絶な笑顔。

彼の顔が恐怖に引き攣る。焦りながらも必死に、一言一言注意を払いながら少女を説得する彼。でも、もう遅い。

彼の説得も虚しく、少女は笑顔を称えたまま、流れるような動作で、彼の胸にそれを力の限り突き立てた。

滴り流れる赤い・・・赤い・・・

彼が言葉にならない悲鳴を上げる。抵抗する彼。血に濡れた短剣。倒れるイスの音。赤いカーペット。染まる深紅。流れる赤い雫。胸を押さえる彼。とうとう彼は力なく崩れ落ちた。白いタキシードが次第に深紅へと染まっていく。

それでも彼は這いずりながら命の限り、少女から逃げようともがいていた。その光景を少女は、くすくすと笑う。それは楽しそうに、嬉しそうに、艶やかに。

少女はぶつぶつと口元で、何かを呟きながら彼の背にもう二度、三度とナイフを突き立てる。彼の鮮血でナイフが滑った。しかし、滑った短剣で自分の手を傷つけながらも、少女は・・・何度も何度

も・・・繰り返す。彼が動かなくなるまで、永遠に。  
血の気の引いた彼の顔。力なく痙攣する彼の身体。  
やがて彼は、息絶えた。

少女は彼を仰向けに抱き寄せた。青白く、恐怖に染まった顔。見開いた瞳。彼の頭を血塗れた小さな手で、優しく撫でながら少女は呟いた。

答エテ下サイ・・・

永遠トハ 何デス力？

答エテ下サイ・・・

運命トハ 何デス力？

答エテ下サイ

少女の声は、もう聞こえない。その答えを彼はもう ない。

次第に彼の白い衣装は、赤から濃い紅色へと全体を染め上げられていく。少女は、虚空を眺めた。

そこには・・・？

女は物言わぬ

可愛いだけのお人形ドールじゃないわ

愛しい 貴方 わかって？

貴方の ちっぽけな自尊心プライドを

満たす為の 道具じゃないわ

愛した 貴方 わかって？

「貴方は、必然たる運命を



本当に信じていることが出来ますか？』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3263c/>

---

深紅 - SHINKU -

2010年10月22日00時45分発行